第1回科学の甲子園全国大会について

〇太田三晴，中神雄一，種市百器，日紫喜豊，岩渕晴行
OTA Mitsuharu，NAKAGAMI Yuichi，TANEICHI Momoki，HISHIKI Yutaka，IWABUCHI Haruyuki

科学技術振興機構 理数学習支援センター

【キーワード】 科学系人材育成，チーム競技，チームワーク

1 目的
科学技術振興機構は2012年3月24～26日の日程で、兵庫県立総合体育館において、「第1回科学の甲子園全国大会」を開催した。都道府県の選考会等を通じて選抜された高校生達が、科学に関する知識とその活用能力を駆使して課題に挑戦した本大会について報告する。

2 事業の背景と目的
国際学力調査等により、日本の生徒の理科学習への興味や目的意識の希薄化など、科学的な「態度面」の低下の指摘される中、高等学校等における科学科の活動は低調であり、運動部の生徒と異なり、科学好きな生徒が切磋琢磨し、評価される場も足りていなかった。それぞれの中、高等学校ごとに、チームで参加する運動部の試合のような科学系の競技会として科学の甲子園を開催した。

科学の甲子園全国大会は、高等学校等の生徒等を対象とした科学技術・理科・数学等における数分野の競技を開催することにより、全国の科学好きな生徒等が集い、競い合い、活躍できる場を構築し、提供することで、科学好きな視野を広げるとともに、トップ層を伸ばすことを目的としている。

3 全国大会概要
1) 参加チーム
高校1年，2年生の生徒6～8人からなるチームで47都道府県の代表選考で選抜された学校が参加できる。第1回の大会は特別枠1チームを加えて合計48チーム，363人の高校生が参加した。

2) 競技
筆記競技と実技競技で構成したが、筆記競技は、理科，数学，情報の中から，知識を問う問題及び知識の活用について問う問題で競うものとした。競技は6人が対談しながら12題を解いた。一方，実技競技は理科に関わる実験，観察等を競う実験問題を2題（化学，生物）と科学技術を総合的に活用して，ものづくりの能力，コミュニケーション能力等を用いて課題を解決する力競う総合競技を2題（「甲子園の土」，「クリップモーターカー」：書き）出題した。どの競技も3人がチームとなって課題に取り組んだ。合計5競技だが，配点は筆記：実技で1:2となるように実技競技を重視した。

3) 運営
2005年から同年のチーム競技を県内で実施してきた実績のある兵庫県が連携自治体として共催することとなり，採点等の競技運営面で協力いただいた。

「産学官が創する科学祭」のコンセプト下，科学系人材育成に熱心な企業12社に協賛パートナーとして協力いただいた。また発表やマスコミの誘致にも力を入れ，インターネットでのライブ配信も行った。

4 結果
事業初年度で認知度も低く，震災の影響も大きかったが，各都道府県教育委員会の協力により，全国で711チーム，5000人以上の高校生が代表選考会に参加した。全国大会は出場選手団456人（引率教員，教育委員会含む），関係者166人以外に一般参加者380人の観覧があった。初代優勝校となった埼玉県立浦和高校に文部科学大臣賞が授与されたほか，協賛企業が成績上位校を表彰し，大会が華やかなるものとなった。
TVニュースや新聞などほぼ全ての都道府県で大会が報道され，科学の甲子園の認知度も上がった。科学好きな生徒に華やかな活躍の舞台を提供できたと考える。